

説明しない教師たち

— マレーシアの図工・美術の授業観察から —

前クアラルンプール日本人学校 教諭

熊本大学教育学部附属小学校 教諭 村上正祐

キーワード：現地理解，造形（図工・美術）教育

1. 多様性の国

急速に近代化の進む首都クアラルンプールは、ペトロナスツインタワーに象徴される超高層ビル群と異国情緒あふれる建築とが混在する人口約150万の大都市である。他方、周辺に足をのばせば、魅力的な熱帯の島々、荘厳で神秘的な山々などの自然にも恵まれている。

住民の6割は、マレー系であるが、華人系やインド系の人々もそれぞれの文化を保ちながら穏やかに共存している。イスラム教を国教としているが、宗教の自由を認めているためヒンズー教や仏教、キリスト教の信仰も見られ、様々な文化が混在して活気に溢れている。食文化も多様であり、市内では驚くほど豊富な種類の料理に出会うことができる。

2. 教育システムと現場の風景

(1) 教育のシステム

2007年に旧イギリス連邦から独立して50周年を迎え、2020年までの先進国の仲間入りを目指すマレーシアでは、国策として特に教育に力を入れている。

教育制度は、日本と同じ6歳から始まる9年間の義務教育制である。1単位時間は30分と短く、ティータイムをはさんで1日に9～10時間の授業を受ける。科目は、マレー語・英語・算数・音楽・図画工作・理科・生活技術、そして宗教（イスラム教徒以外は道徳）である。男女共学だが、座席は分けられている。



【授業の前に整列をして教室へ入る】

(2) 厳しさとゆとり

授業が始まる前、生徒たちは廊下に整列する。そして、何やら一斉に言葉を唱えだす。また、ある学校では廊下に整列はしなかったが、始業と共に一斉に起立して同じような文言を一斉に唱えていた。詳しい内容は分からなかったが、学習できることに感謝し、しっかり学びますといったことを神に誓うのだという説明を聞いた。

また、学校の先生の言うことは絶対で、厳しいそうである。忘れ物をしても教師が貸し出すということはない。用意しない本人が悪いのだから、自分で何とかしなさいというのが当たり前のようである。

しかし、きびしい感じがする一方で子どもたちの表情はとても明るい。その笑顔が見られるのがティータイムである。マレーシアの始業時刻は7時半と早く、子どもたちは早朝のお祈りと朝食を済ませて登校しているのでおなかもすく。そこで、10時半くらいに「マカタイム」というティータイムがある。どこの学校にも大体食堂があるので、児童は好きな物を注文して食べたり、好きな飲み物を飲んだりする。教師もこの時間はロイヤルミルクティーを飲みながら、ミーゴレンという麺やカレーパフ、お菓子などを食べてリフレッシュする。時間に余裕を感じさせ

る雰囲気があり、時間に追いまわられている日本の学校と比べてうらやましく感じられた。

3. 二つの学校の観察授業から

国立のスリハタマス校と私立スリベスタリ校の2校を訪問して図画工作の授業を観察する機会を得た。

(1) 説明しない教師たち

2つの小学校の観察授業では、小学5年生と2年生を参観したが、一番の違いを感じたのは、どちらも教師の説明はほとんどないに等しいということである。一言二言話したら板書もほとんどなく、すぐに活動という感じであまりの短さに驚いた。よくこれで子どもたちは活動に入ることができるなと思ったが、戸惑うこともなく活動を始めてしまった。

その理由は教科書にあった。教科書は、左のページに写真入りの制作の手順、右のページに実際に制作をしたり描き込んだりするワークプリントという見開きで構成されている。日本の図工の教科書に比べるとこじんまりした感じがするが、技法や制作手順が非常にはっきりしている。また、低学年で学んだ表現方法が1年生から6年生まで系統的に、発展的に繰り返しながら学べる構成になっている。したがって、1年生から6年生までの同じような学習の流れになるので、児童は迷うことなく学習活動に入っていきることができるのである。

(2) 作り方は単純明快

小学5年生の題材は、手提げのついた紙袋のデザインを制作する授業。デザインの発想を促すような指導は特になく、題材は事前に知らされているのか、各自デザインの構想をもって授業に臨んでいるようで、児童の中には参考となる図鑑などを自分で用意していた。

小学2年生は、テキストに印刷された花や葉を彩色して切り取り、竹串に張り合わせて作るという簡単なものであり、教科書に載っている手順を見れば特にもむずかしさはない。



【パスでカラフルに仕上げられた児童作品】

(3) 図工作品室

見学した国立の小学校には、様々な学年の子ども達の作品をピックアップして掲示しているアートルームがあった。絵画だけでなく、色紙テープできれいに編み込んだ作品や工芸なども展示してある。特に、クレヨンで彩色したある絵はグラデーションがすごくきれいであり、その他の展示してある作品の色づかさも南国らしさを感じるような明るさがあり、とても印象に残った。

このような環境を用意することで、子どもたちは先輩たちの作品を見ながら自分たちが作って将来つくるであろう表現のイメージを膨らませることができるのであろう。

子どもたちが自分で準備し、時間いっぱい楽しみながら取り組むマレーシアの造形教育のよさを今後の自分の実践にも生かして行きたいと感じた観察授業であった。